

五島列島のカトリック集落に関する研究

— 中通島・大水集落を対象として —

上田 大輔

0 はじめに

五島列島のキリシタン集落は、多くが長崎本土からの移住を起源とする居付集落である。それらは隔絶性の高いところに立地し、斜面に段々畑を持つ独特の村落景観を作り出している。明治以降のキリスト教禁制の撤廃により、隠れキリシタンの一部は名乗り出てカトリック集落を形成し、一部はそのままキリシタン集落として存在した。

本研究の対象地である五島列島中通島のカトリック集落「大水」は、教会資料によりその最初の開拓者夫婦から現在に至るまでの血縁関係が、明らかに出来た集落である。その世代の移り変わり(イエワカレ)と社会構造の変化に着目し、集落空間がどのように形成され変容したのかの分析を行う。大水集落の形成から現在に至る変容を明らかにすることで、五島列島のカトリック集落の特徴を述べることを意図している。

分析にあたって、開拓が始まる近世後期から大水教会が建設される明治14(1881)年頃までを集落の「形成期」、新天地・新田原への移住が始まる昭和3(1928)年頃までを「成長期」、戦後の高度成長期が始まる頃までを「飽和期」、その後を「収縮期」とする。

1 集落の空間構成

大水は番岳北麓に位置し、近世後期に西彼杵・外海地方からキリシタンが居付いたことに始まる。図2,3にみるように斜面に連続して耕地が広がりその間に家が建っている部分と、飛び地のように耕地が存在しその端に家が

建っている部分とがある。水道が引かれる前の水の利用状況を見てみると、番岳に降った雨がわずかに谷になった部分から湧き出したカワ(湧水)の近くに屋敷が存在していることが分かる。またコウチ(川)と高低差が少ない家々は、そこから水を汲んで利用していた(図4)。微地形に合わせて屋敷を作り、耕地を展開させている。

2 村落の社会構造

2-1 村組織と教会組織

村の運営は村組織(郷)の役員と教会組織の役員の5人で行われている。郷から抜けると郷費だけではなく、教会費も払わなくなる人がいることから、村組織と教会組織が混同されていることが分かる。宿老やオシエカタといった昔ながらの名称や役を今も残し、独立した教会運営をするなど、古い信仰の形態を守りつづけている。以前は郷で仕事を請けて郷仕事として、集落内の道路水道工事などを自らの手で行っていた。これらの郷の活動にはケンヤ(郷に入っている戸)からは必ず各戸一人ずつ出すようになっていて、夫が漁業で出稼ぎに出ているところ

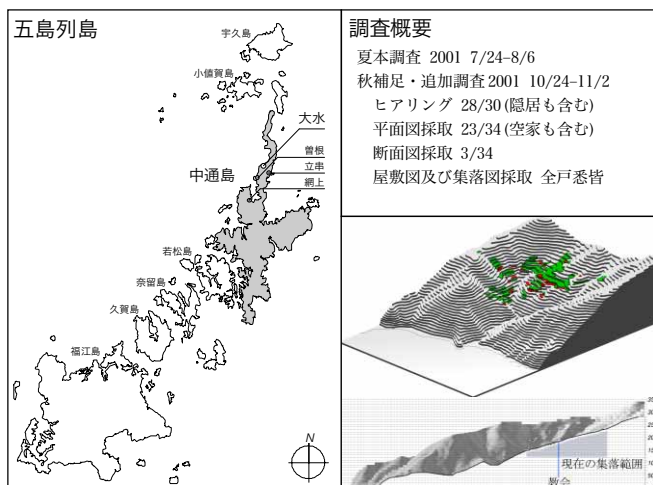


図1 五島列島の中の大水

図2 大水の地形

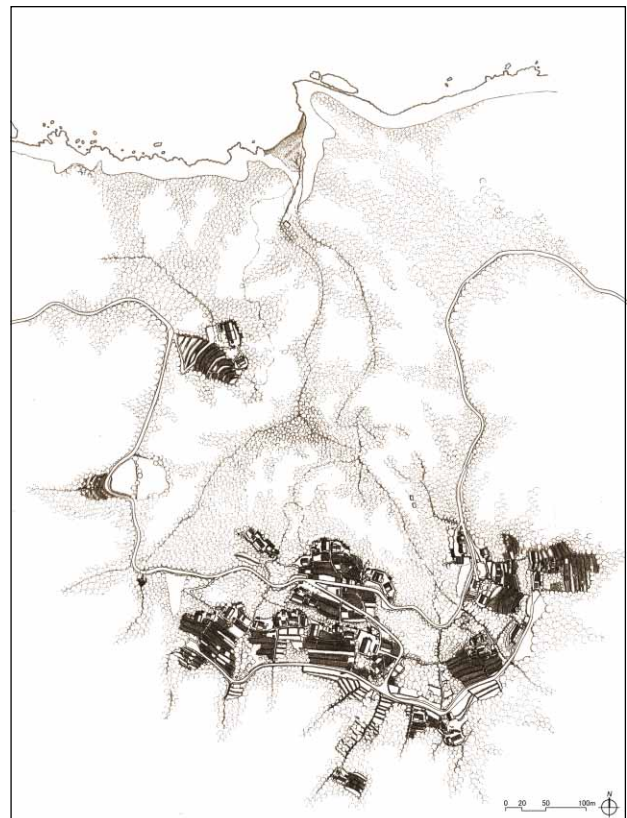


図3 大水集落図

などは妻が出ており、そこに男女の別はない。また、結婚式の後のカオミセや葬式の時などのヨバレ、タチイエやヤネヒキなど、集落内の相互扶助の慣習があった。カオミセの時などは子供から隠居まで集落全員を呼ぶ。そこに集落全体の結びつきがみられる。

2-2 婚姻関係

集落形成期のキリシタンの頃は周辺の居付集落と、カトリックに復帰してからはカトリック集落のみと婚姻関係にあった。成長期の大水はすべてのイエが従兄弟同士にあたり、曾祖母に同一人物がないことを確認しなければ結婚出来なかった当時のカトリックの状況では、お互いに結婚することはなかった。発展期になると三代調べが行われるようになり、村内婚が増えた。

2-3 血縁関係

ヒアリングで現在の大水は最初に居付いた世代から数えて第五世代にあたと聞かれた。また三代前からの集落内の血縁関係をほとんどすべて答えられる人もいた。教会資料から作成した系図と符合してみると正確に一致した。しかし、集落内の全戸が姻戚関係になるということは知っていても、第二世代がすべて従兄弟にあたり、現在の家系がすべて血縁関係に当たるということを把握している人はいなかった。現在は4つの家系があると認識されている。

2-4 イエワカレ慣行の継続

大水では、ヒアリングによると隠居分家が古くから一般的に行われている。これは兄弟が平等にイエワカレ(分家

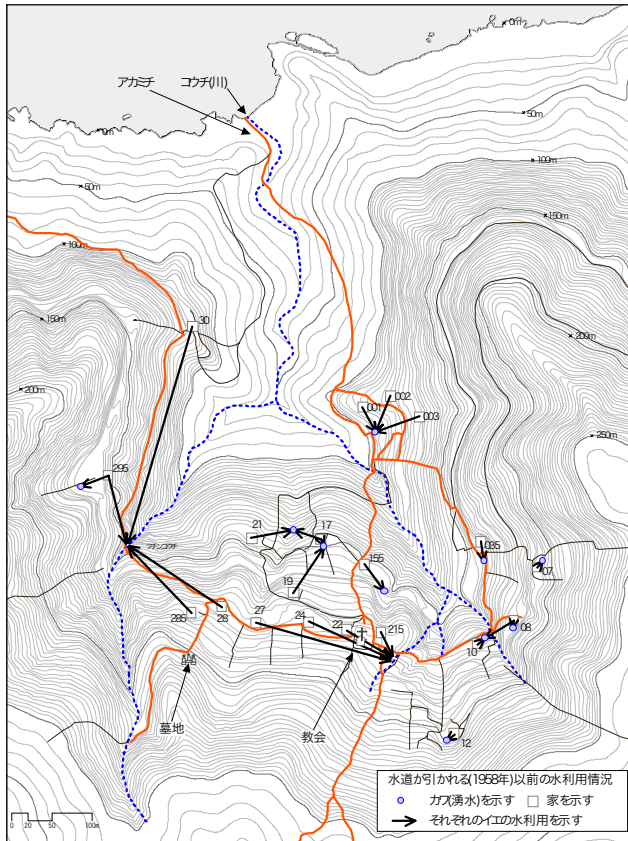


図4 カワの利用と屋敷の配置

形成)をするための仕組みである。本来は開拓を行いつつ分家をするための仕組みであったが、開墾をしなくなった現在も行われているのは、その均分相続を行うといった原則を重視しているためだと考えられる。この原則に則った分家形成の仕組みをここではイエワカレ慣行と呼ぶことにする。長男世帯をオヤカタ、隠居の世話をする末子世帯をオヤカイと大水では呼んでいる。

3 明治期の集落像

3-1 教会資料から社会構造を読み解く

洗礼台帳によると、台帳が作成された明治14(1881)年当時大水には12戸存在し、うち2戸は隠居であったと思われる。直後に他出した1戸を除くケンヤ9戸は従兄弟関係にあたり、集落形成期は強い血縁関係により結びついていたと考えられる。また明治41(1908)年に書かれた家族台帳によると、18戸に世帯が増えている。長男夫婦世帯と、親と残りの子女の世帯が分けて書かれた事例が5つ、また末子と親が同居している事例も見られることから、当時からイエワカレ慣行が行われていたことが分かる(図5)。教会資料と戸籍を比べると、名前の漢字や生年月日が異なる例が多いが、住民の話からは教会資料の方がより正確である。

3-2 地籍集成図から空間構成を読み解く

近世期、大水は網上郷の所有地で、海を挟んで遠く離れていたため、地下集落の近くに居付いた他の集落に比べ、隠れて信仰を守りながら生活を送るのに都合がよかった。その後、明治20年の裁判(網上騒動)により大水の土地とな

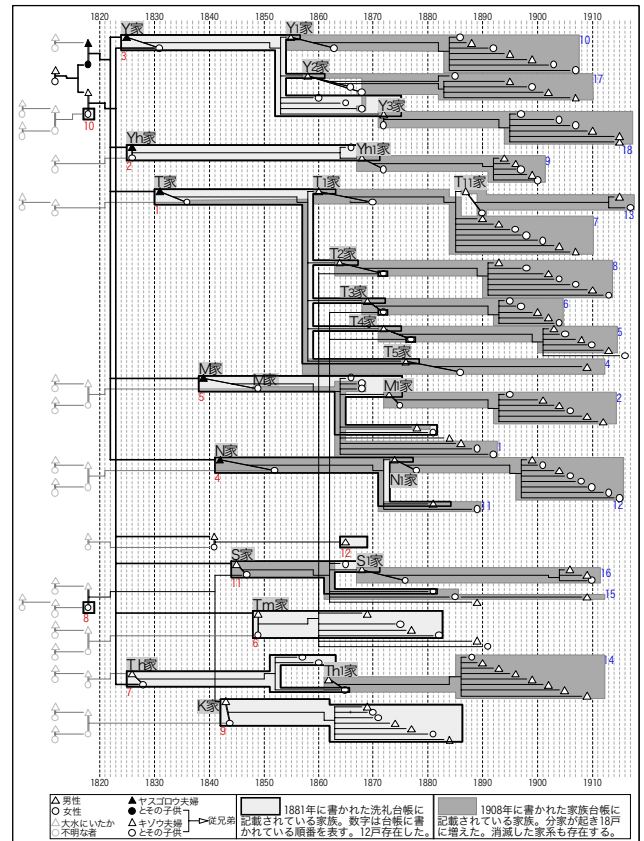


図5 洗礼台帳・家族台帳にみる家族形態

り、青方村から北魚目村に編入され、その際に地番が付け直された。その時点で開発されていた土地は個人の所有となり、未開の土地は共有地となったと考えられる。

地籍集成図の地番に枝番号が振られているものは、後に分筆が行われたものと考えられ、一筆として復元すると当時の土地の利用状況がそこから見えてくる(図6)。現在まで一筆のところは、当時既に分筆が行われており集落形成期から開発が進められていたところである。ここに位置する屋敷は当時から屋敷として利用されていたと考えることが出来る。その数は11で、教会資料に見える当時の戸数とほぼ同数である。他出したイエの屋敷とみなされる場所も引き続き屋敷として利用されたと考えられる。また、現在の畑の形状と比較してみると、同じ形の土地がいくつかあり、土地を相続する際に畑一枚単位で均分相続されていたことがうかがえる。

また、網上騒動の後、共有地であった各小字の山林を、それぞれ各イエ毎に平等に分けた。そのため、それぞれのイエは集落内に数ヶ所の山林を所有することになった。明治中期以降この場所に開発が行われた。明治初期の開発が形成期に開発された土地に連続する拡張型であるのに対し、

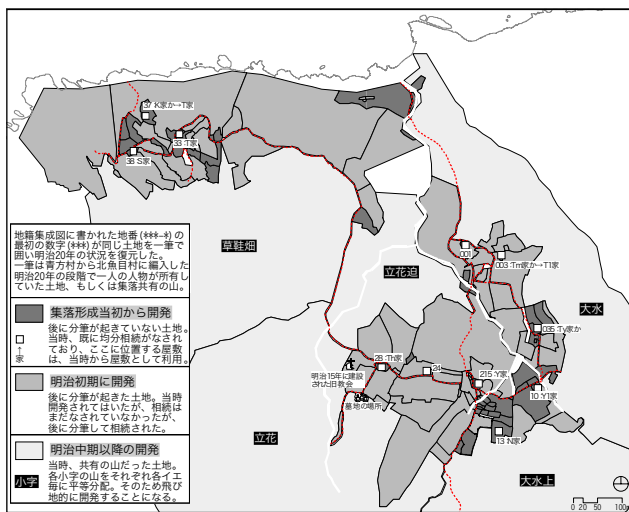


図6 地籍集成図の地番からみる空間構成

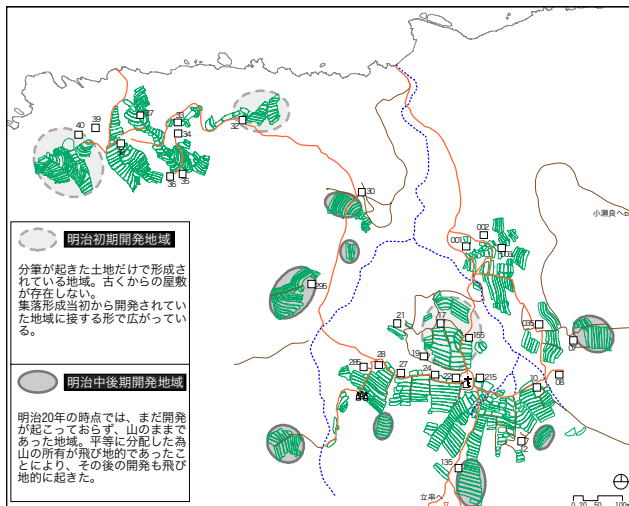


図7 土地開発の時期と地域

中期以降は飛び地型の開発が行われている。各自の所有する山林に対して開発を行ったために、分散した飛び地型の開発になった(図7)。

4 イエワカレ慣行の実態

4-1 イエワカレ慣行の事例

またヒアリングにより判明したイエワカレの事例を時系列に沿って並べたものが、図8である。ほとんどの事例が隠居分家を行い、最後に隠居を行っている。また、そうでない事例もそれぞれのイエの事情に合わせた形で均分相続の原理に則りイエワカレを行っている。大水ではイエワカレ慣行が継続されていると言える。

4-2 イエワカレ慣行と空間

次にそのイエワカレ慣行が空間的にはどのように行われたかを時代別に見ていく。

成長期(図9):どの事例も大きく移動をしてイエワカレをしている。この時期は耕地からの生産が生活を支えていたために新たに作られた屋敷は自営できる程度の耕地が必要とされた。形成期に開発された土地の外側か、新しく所有することになった山林に開発を行ったため、大きく移動することになった。

飽和期(図10):集落内の開発が進み、新たなイエを作り養うだけの耕地を確保することが難しくなった頃、福岡県新田原地方への移住が始まる。大水を捨てて他出するイエと、子の世帯を残し隠居分家を行うかたちで他出するイエがあった。他出した後、隠居の際に大水に戻ってきた事例

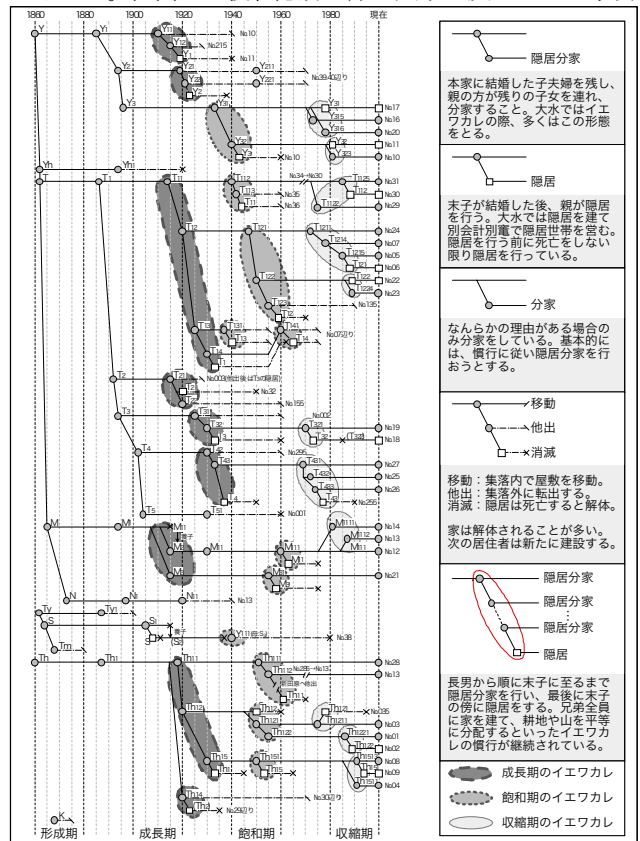


図8 イエワカレの事例:時系列

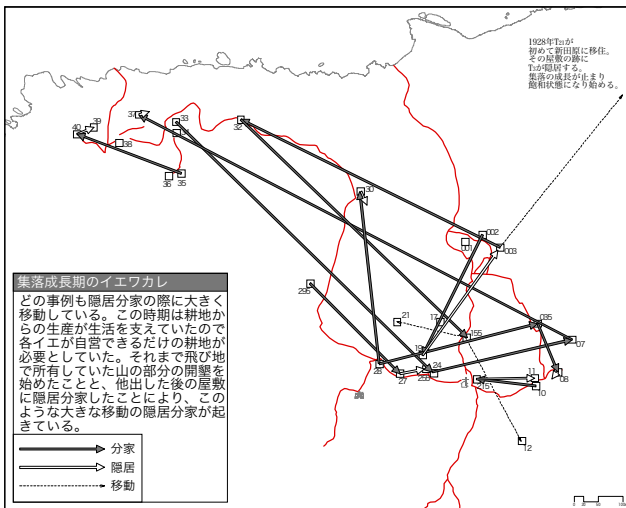


図9 イエワカレの空間プロット：集落成長期

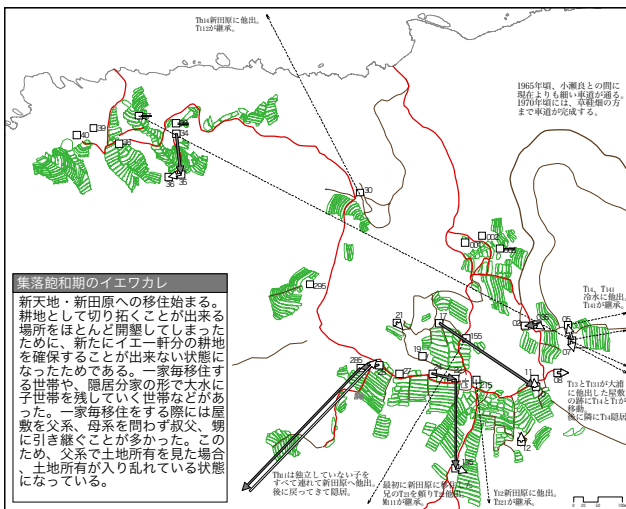


図10 イエワカレの空間プロット：集落飽和期

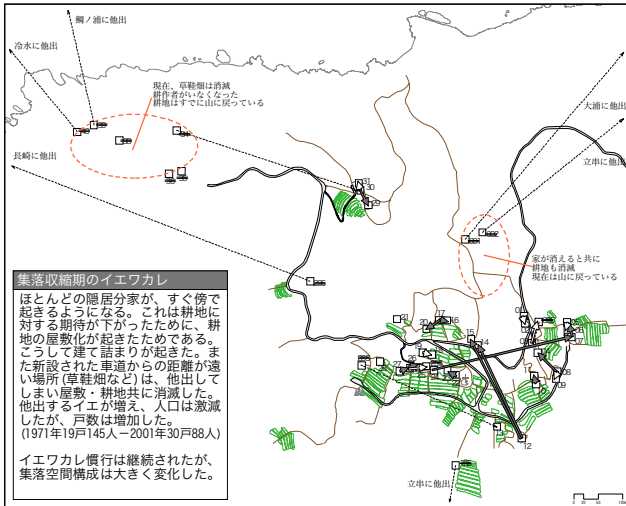


図11 イエワカレの空間プロット：集落収縮期

もある。他出した後の屋敷は父系、母系を問わず叔父や甥に継承された。このため、土地所有が複雑になった。収縮期(図11)：高度成長期以降、車道が集落内の上方に通った。車道から遠い家々(草鞋畑等)は大水を捨てて五島内に他出した。人がいなくなった土地は山に戻った。また、生活様式が変化し耕地に対する期待が下がった。そのため耕地の宅地化が起り、イエワカレは近傍で行われるようになった。こうして屋敷の建て詰まりが起きた。

集落形成期は集落内の土地の所有者が決まっていなかったために、分家をする際にそれまでの耕地の外側に連続するように開墾を行った。その際、全戸が血縁関係にあたるために、必ずしも本家に連続するかたちでの開発ではなかった。その後、大水の土地が自らのものになった時に、未開の土地を平等に分配した。そのため、その後の開発は自らの飛び地的に所有していた山に行くようになった。このようにして、連続的に開発された土地と、飛び地的に開発された土地が点在する景観が形成された。また均分相続が繰り返された上に、母系的な継承も起きたため、複雑な所有関係が起きている。

このように、各時代を通して、形態としては同じイエワカレ慣行を行っているが、空間的にはその時期に合わせるかたちでイエワカレを行っている。平等性を保ちながら、その社会状況に合わせたかたちで運用したことにより、空間構成は大きく変容し、現在の景観を生み出した。

4-3 隠居の役割

本来、隠居をするということは郷仕事から解放され、自らの家のため労働ができるようになることであった。大水において、隠居が継続しているということは、それだけ郷仕事が大変なものであったといえる。

隠居は子供の面倒もみた。現在でも、両親が働きに出ているために夏休みの昼間などは隠居が子供の世話をしている。逆に子供が隠居の水汲みをしたりなど身の回りの世話をしていた。隠居はさまざまな伝承を担っていた。集落の子供達を集め、信仰を教えたり、先祖が居付いた当時の話を聞かせたりしていた。先に述べた結婚時の三台調べやこうした伝承により先祖との繋がりを正確に把握しており、それを大切にしている人が多いのだろう。

また、生涯単身だった者や障害者が隠居として生活していた事例が時代を通して見られる。甥の中でオヤカイではないものがその隠居のオヤカイとして面倒をみていた。こういった隠居はオシエカタ(子供に公教要理を教える)をすることが多く、集落の中で役割を持って生活を送っていた。このような福祉的な意味合いも持っていた。

5 まとめ

大水は血縁集落であったために、その平等性が強く現れ、イエの領域を持続するのではなく分解する方向に進んだ。大水にみられる隠居分家により平等にイエワカレを行う慣行は五島列島のカトリック集落に共通するものである。財産を平等に分配する隠居分家慣行はかつて西日本の集落に広く存在したものである。キリシタンはその平等性からこの隠居分家慣行を採用し、行い続けた。社会から隔絶された五島のカトリック集落に、奇しくもその仕組みが残ったと言える。